

初  
戀  
秦  
恒平



# 初恋

秦恒平

講談社

### 著者略歴

1935年京都市生れ。同志社大学文化学科卒業  
後1974年夏まで医学書院勤務。この間1969年  
「清経入水」で第5回太宰治賞受賞、創作と  
評論の生活に入る。日本文藝家協会会員。  
著書「みごもりの湖」「慈子」「墨牡丹」「女  
文化の終焉」「茶ノ道庵ルベシ」ほか多数。

### 初 恋

一九七九年十月二四日 第一刷発行

定価 二二〇〇円

著者 秦 恒平

編集 株式会社 北洋社

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二一二一二

郵便番号 一一一

電話 東京(〇三)九四五一一二二(大代表)

振替口座 東京八一三九三〇



印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

乱丁・落丁はおとりかえいたします。

© Kohei Hata 1979

# 初 恋

装画

高山辰雄

目次

初恋

5

余霞楼

77

マウドガリヤーヤナの旅

105

加賀少納言

147

或る「雲隠」考

181

あとがき

261



## 初 戀



本地雪子の父親が、あのへたな浪花節語りのなんとか愛八とわかったのは、高校一年の夏休み中だった。毎年、地藏盆の中日に町内の大人が宵の余興に呼んできた。

愛八は一見愛想のない細面にぐいと眉毛の濃い四十男だった。へんに威があつて、そのくせ上半身を撓しなわせるおかしな歩き方をした。建仁寺町に家があるというこの男の、浪花節語りはあれは内職、と、噂どおりに三年四年も聴いてたしかに巧くない。ラジオ育ちで虎造や勝太郎の名調子が耳にあり、まだ小学校、中学生ではさすがに黙っていたけれど、すこし年嵩な剽軽者の大工の市ちゃんや扇屋の「ドラ」などは、面白半分、口汚くよくやじった。すると愛八は「塩原多助」でも「天保水滸伝」でもいいしおにうちきり、逆に即席の舞台から腕などまくってぼんぼんやり返す、その仁輪にわ加かめく掛合かあひいの方が例年大受けて、今年は誰をという時期になると「愛八」「愛八」と一つ覚えに子どもは愛八びいきだった。町内会長以下大人は、私の父も、一応顔をしかめながらいっそ安あがりなのを徳にして、おもな余興がこれは決って映画なら、もう一つは結局愛八を呼んだ。あとは、景氣のあがらない当世漫才だったり古くさい西洋手品だったりした。

だが愛八の人氣は、へたな浪花節をやじり倒せるからではなかった。一つには曲師のおぼはんのふしぎな貫禄だった。めんどくさそうな無表情ながら、愛八にくら

とても化粧気のない顔のつくりがふつから大きくみえ、掛声がよかった。妙に励まされるような、言いたい陽気があった。やじられて愛八が立往生したりやり合っているあいだ、知らん顔で三味線をチリチリ爪弾きつづけている音締めも、しんと静かにはなやいでいた。ちょっと気どつてみたい大人が、いっそ愛八抜きで三味線を聴かせろと持ちこんだ時、そっけなく撥をちよいと横に振った風情に私はえらく共感したこともあった。

そんなわけで浪花節はたいがい、ほんのさわりを、そのかわり六、七曲はつぎつぎ語ることになり、目先は相応に変わった。が、なにより浪花節をすませてから付（つけた）りの芸を見せる、これが必ず拍手をあびた。浪花節が内職ならそれは愛八の隠し芸、だが、ちょっと名づけようのない本物の変わった芸だった。

今なら私は躊躇なく物真似と言う。ごく初期の猿若を考える。声色とはちがう。ほとんど口は利かなかつたが、だからパントマイム、と洒落ても言いにくい。「洗練」という二字にはほど遠く、ただ黙々と鳥・けものの姿態をまねた。とくに自分が醸した猿酒に猿が酔っぱらう場面など、よほど猿の芸が得意だった。仔猿が酔って、二匹の犬を相手に喧嘩する。細い愛八のからだがちっちゃくまるく毛を逆立てて、四つ這いに走ったり、二本脚で立ったり、木に登って下で喚く犬をうかがう容子に子ども大人も息をのんだ。ちょっと猥褻な身ぶりがかならず混じるのさえ、ただ眼を瞠って見た。

途中、一つ二つ短い歌をうたったのが、節はへたな「内職」どころでなく面白かつたし巧かつたけれど、何ごととも意味はよう聴きとれなかつた。

最期に人に矢を射かけられて梢から真逆様に落ちて猿が死んでしまふ。とぐろを巻くようにはじめ丸く小さく、それがじりじりと伸びて伸びきってすっかり死んでしまふのを時間をかけて演じた。路上の客は声一つ立てえなかった。拍手は、一と呼吸のあとわっとわいた。

紋付袴を脱いで愛八は色の浅い襦袢姿になっていた。帯は黒いのをかんたんに締めていた。ぬいぐるみは着ない。扮装もしない。手拭いと扇子をたまに巧く使った。舞台といっても旧家のすこし引っこんだ表に、道路むきに三間と一間半くらいに造ったにわか栈敷のようなものだ。が、猿が、犬が、時に鳶や雀がそこで生きて働いた。そして最期に猿が死んで終る、それが愛八の芸だった。胸にこたえた。

ああいうのを何というか、私は大人に訊いたことがある。父はちょっと考えてから、「のろんじ、やな」と呟いた。低声で「か、つ、たい、や」とも言った。「のろんじ」という発音が不思議だった。「かったい」の語感には、片輪な病氣もちという気まずい響きがあったので領ききれなかったが、「のろんじ」に妙な実感があつた。

「どない字で、書くねん」とまた訊いた。父はよう答えなかった。

愛八が、はやくに松島屋の社中を破門された男という噂も大人はしていた。先代仁左衛門は世になく、関西歌舞伎の看板役者だった我当がまだ襲名まえだった。今の我当がさらにその息子で、私と同じ中学にいた。木地雪子も同じ学年にいたが、我当とも雪子ともほぼ無縁に三年間を過ごした。

卒業前の一年間私は雪子と同じクラスだった。が、向うはいつも眼から下は穴に籠っているよ

うな子で、教科書は上手に読むし、たいがいの男子より速くも走れるのにそばへ行くと穴にひっこんだ。それでも時として引っこめかねた頭をこつんとやるくらいのことはあったが、べつにいやな顔はせず、眼が合うと眼だけにこつと笑いさえた。しかし穴から出てくる風情はそぶりもなかった。修学旅行の葉づくりを手伝わせようとしたがだめだった。私が演出役を引き受けたクラス対抗の劇にも出てくれなかった。あと押しをする友だちもなく、本当にこんな木地雪子が、一年二年生の頃にも学校にいたかと思うくらい目だちにくい生徒だった。

いないわけがない、入学式の日にも私は雪子に迷惑をかけていた。式のあとクラスごとに教室に入るとすぐ、最前列に着席していた私は、担任の女先生に職員室の机から「茶色い袋」を持ってきてと頼まれた。教室は二階だった。私は教室を出るとせわしなく廊下を走って講堂の前の東階段へ急にまがった。正面衝突は免れたが、なぜかそんな時分に一人で上がってくる木地雪子（とあとで知った）の肩をかすり、あっとしびれたような無念の表情でその女生徒は粗忽な私をすばやく見た。

「あ、勘忍——」

雪子は電気に打たれたように左の腕をもう一方の手でぎゅっと握ったまま、「でもないか」と問う私へ形ばかり頷くととなりの教室へ、うしろの戸から肩をすくめて入って行った。織い手だった。

三年間、あの衝突一件だけが印象にあった。かすかな借りの意識だった。が、卒業すればしまいだ、木地雪子は高校へ進学しない生徒だった。勤めるかどうかも知らなかった。卒業式の日

黒いビロードの、ところどころ白いレースで飾った存外愛くるしい洋服を着ていた。すこし肉がついて背丈もあった。卒業生答辭を読んで自分の席へもどる途中、ふと雪子に見られているのに気づいてそう思った。髪を短かく切りそろえていた。

高校一年の新学期は、教科書を拾い読むだけでもさまざまに刺戟的だった。生物、解析Ⅰ、漢文、とりわけて日本の古典。万葉や古今の和歌と並んで「仏は常に在<sup>いま</sup>せども 現<sup>うつつ</sup>ならぬぞあはれなる 人の音せぬ曉に ほのかに夢に見えたまふ」とか、「舞へ舞へかたつぶり 舞はぬものならば 馬の子や牛の子に 蹴<sup>くぶ</sup>させてん」などという今様を「へえ」と思って読んだが、「のろんじ」は知らなかった。かりに「呪師」と書かれ「呪師の小呪師の肩踊り」と謡われていても、それが「のろんじ」と見当をつけて読むことはできなかっただろう。むしろ、次のこんな歌謡が教科書に出ていたら、猿若や猿曳きのさの字も知らなかったが、少くも愛八と、近づく夏休みのこととは思ひ出した気がする。

御<sup>みま</sup>厩<sup>やう</sup>の隅<sup>すみ</sup>なる飼<sup>かひ</sup>猿<sup>さる</sup>は 絆<sup>きつな</sup>離<sup>はな</sup>れてさぞ遊ぶ 木に登り 常盤の山なる檜<sup>ひのき</sup>柴<sup>しば</sup>は 風の吹くにぞ  
ちうとろ揺<sup>ゆ</sup>ぎて裏<sup>うら</sup>返<sup>かへ</sup>る

猿は馬の守り神だった。古代から武士は馬小屋に生きた猿をつなぎ、門<sup>かど</sup>附<sup>つけ</sup>の呪師たちに猿曳きの被<sup>か</sup>いの舞を舞わせたものだ――。

――その夏休みも終り近く、八月二十一日から三日までが町内の地藏盆だった。但しもうそこ

へ昼間から顔をだし、緋毛氈の床几だのお地藏さんを祭ったお供え物の前で中学生小学生あいてにトランプやゲームで遊ぶ気になれなかった。福引、西瓜割り、午前午後のお八つの割当からも高校生ははずされていた。が、中日の宵の余興は大人子供の別がない。私は、なんとなく愛八の芸にこれまでとちょっと違った興味らしいものを持ちはじめていたし、映画も今年は現代物らしいので観てみる気だった。

映画館があつたのではない。交通どめした道の両側から適当な幕を紐でつり、界限の電灯をけして路上でうつす。それを町内中がめいめい椅子持参で道路なりに細長くなって観た。蚊がきいた。が、家にいるより格別涼しかった。夜空が青かった。映画のあと、盆踊りが夜更けまでつづいた。

その伝では愛八の芸もあくまで仕出しだった。が、道具屋から借物の床几を並べて愛八用に即席の舞台を道路わきに造ってやるのを、誰も厭わなかった。両袖に形ばかりの幕も張った。そんな作業じたいが一年の嘉例の如く、祭儀めいていた。

京都ほど早くに小学区域が整い、またいくつかの町内にびしと区切られた街もすくないが、その町内ごととにきくと地藏が大日如来の小祠がお守りされていて、盂蘭盆うらなぼんがすみ、十六夜いざよひ大文字の送り火を見とどけやがて二十日すぎると、今度は町内中の子どものためのお盆、つまり京都中が地藏盆を迎える。

万端大人の世話で定め場所へ祠からお地藏を移し、然るべく壇を造り毛氈や提燈で飾って手厚く祭る。露地があれば、床几は露地うちに並べ、なければ表の道においてそれにも赤い毛氈を

敷いた。子どもはおじゃみ、竹返し、綾取り、ぐच्छよっぱ、せっせっせなどで順ぐりに遊び、トランプ、将棋、双六までめいめい持ちだした。二た組に別れて「お国は日本」「お商売は」などと騒々しいゼスチャー・ゲームもした。そして随時に仏前のお下がり配られた。まだ芋するめか駄菓子子の時代で、トマト、梨、わけて西瓜はなかなか眼をひいた。どの家が西瓜をお供えるか見ものだった。バナナというものがまだ、なかった。ほおずきがやたら朱々あかあかと盆に盛ってあった。

各戸に応分の寄付を募って福引や余興の費用にあてた。軒ごとに思い思いの絵を描いた燈呂とうろうをかけ、それをまた一つ一つ見てまわるのが楽しみだった。お地藏を祭った前の路上には五彩の大燈呂が高々と吊された。古いレコードを朝からかけっぱなし（蓄音機は例年私の父が据えた）、夜になると盆踊り唄に変わる。東町も西町も同じ、裏ン町も同じだった。私は欠かさず盆踊りに出ていった。物足らなければよその町内へ出張った。余興も、今年はどこの町内が面白そうとわかれるとどつと子どもが流れて行ってしまい、そうさせまい大人はいつも趣向に苦心が要った。

それなのに欠かさず愛八を呼んだのだから、チョンガレめく浪花節はご愛嬌として、どれほど人気の「のろんじ」か、一度呼ばなかったらよそへもって行かれるのは必定だった。

毎度のとおりと承知で愛八の時間まで、好きな青紫蘇をたっぶり、氷のかち割りもろとも冷素麵そうめんを策からじかにすすりこんだ。父は太った腹を盛大に出して縁側で寝入っていた。冷房もテレビもまだなかった。暑い盛りは寝てしまふのが勝ちだ、眼が醒めるとたらいで行水した。そばを家の主の蛇へびが這い、庭笹ていさがそよともそよがなかった。

愛八の曲師をあい勤めるのが、今年は若い声やなと思った、それが木地雪子とは想像もしなかった。みな、しんとしてしまっていた。

雪子と私にもわかったのは、愛八がそろそろ黒い着物を脱いで、さてまた猿酒を醸すか、と思った矢先へいきなり「娘、愛丸」をせまい舞台に手を取って引っぱり出し、「サービス」の芸を見せると道化をこねて大みえを切ったからだ。町内に同学年の男はほかになく、しかし中学時代に机を並べた女生徒が四人もいて、さすがにさっきから「木地さんや」「木地さんやんか——」と囁きあうらしかった。

「愛丸」の雪子は神妙に、愛八の寂びれた小歌で短い舞を二つ舞った。面白おかしいものでなかった。やはりなにか物真似ではあるらしく、今なら、「いとし殿御の御座るやら、犬がイヤ犬が吠え候四つ辻に」と「うづぼさ 猿」ふうの小舞を連想しただろう。歌は訛っていたし、物真似もものを食ったり泣いたりする恰好がえぐくて、狂言よりもっと古い、やはり猿楽者の門附か大道芸かと思ただろう。むろんぬいぐるみ、つまり「かぶりもの」はつけてなかった。ただ「のろんじ」「かったい」と聴いた父の呟きが耳に蘇るばかりだった。

雪子の出番は私の中をあっという間に過ぎて行つた。雪子がかつて見知らぬ表情をしていた。

「お父ちゃんより、巧いやんか」

扇屋の「ドラ」が叫ぶと笑って拍手になった。雪子がどんな顔をしたか、一瞬眼をとじて見なかった。入れ代り急に親方のていで愛八がまた出てくると、やじが増えた。迎え撃つかまえて愛八はボクシングの恰好をしたが似合わない。のに、真打めいてことしの愛八は柄が大きく見える